

## 語れない自己の物語：金史良の「光の中に」論

金, 成妍  
九州大学大学院比較社会文化学府修士課程一年

<https://doi.org/10.15017/8362>

---

出版情報：九大日文. 2, pp.98-110, 2003-02-28. 九州大学日本語文学会「九大日文」編集委員会  
バージョン：  
権利関係：



# 語れない自己の物語

——金史良の「光の中に」論——

K I M  
S U N G - Y E O N  
金成妍

## 序

候補第二席作品「光の中に」は、実はもって私の肌合に近く、親しみを感じ、且つ又朝鮮人問題を捉えて、其示唆は寧ろ国家的重大性を持つ点で、尤に受賞に値するものと思われる。

第十回芥川賞における久米正雄の選評である。昭和十四年、金史良の「光の中に」が朝鮮人の作品としては初めて芥川賞の候補作に選ばれた。太平洋戦争目前の出来事であった。日本で、朝鮮人による日本語創作が「国家的」問題として認識されていたこの時期、朝鮮半島は「同化政策」下におかれていた。「同化政策」とは、「形も心も血も肉も、悉くが一体でなければならん」という「内鮮一体」論によって、朝鮮人をより「完全なる日本人」たらしめようとするものである。「内鮮一体」化、朝鮮人の皇国臣民化の政策は、民族語である朝鮮語抹殺の方針をもって行なわれた。

「内地」日本の民族語である日本語が、「外地」朝鮮の「国語」となった。そして日本文壇は「国語」創作による「国民文学」を提唱するに至った。菊池寛は「矢張り国語で書いた方が結局宜い

のぢやないか」といい、「朝鮮文学を振興させるのには、矢張り市場の広い国語で書く」のが宜いといっている。また、朝鮮の文人崔載端は、「朝鮮文学が日本文学と対立してではなく、日本文学の一環としてその中で充分に朝鮮文学として独自性をもつべきだ」と主張している。このような状況は、朝鮮の作家たちを「民族語」と「国語」の分岐点に立たせた。金達寿は、「彼らには眉をあげて前へでるか、眼をつぶって絶望するか、へこへこと妥協し降伏し裏切るかの三つの道しかなかった」と語っている。彼らに与えられた道がこの三つしかなかったとすると、金史良はこの三つの道、いずれにも足跡を残した作家だといえる。

日本語創作について金史良は、「内地語で書く人々には、絶対的に、その当人に或る痛切な心的動機がある」と記している。「絶対的な心的動機」によって「国語」を用い、「内地」に向かって活動を開始したその出発線に、「光の中に」がある。「止むに止まれぬ気持ちに追はれるやうにして、一気に書き上げた」という「光の中に」は、金史良を日本文壇に登壇させた彼の出世作である。「光の中に」が日本文壇で注目されたということは、何を意味するのか。国家的重大性を帯びた日本側の要望に、「光の中に」は適っていたからなのだろうか。

一方、日本文壇を意識して書いたはずの自作が、日本文壇で評価されたとき、金史良は「嘘」だと、自分は「嘘」を書いたと書き残している。自分の書いたものに対する「否定」には一体何が潜んでいるのか。その裏面には「本当のこと」が欠如の形で示されていると考えられないだろうか。「嘘」「本当のこと」という金史良の言葉は、語れない自己を語るための工夫が、ある種の「仕

組み」となって表面化したものではないかという疑問を呼び起す。

本論では、朝鮮に対する日本側の要望、そしてそれに対する朝鮮側の受容の態度との関係を、作品の分析を通して考えてみたい。支配・被支配の関係が、日本と朝鮮を「内地」・「外地」化させ、朝鮮文学が日本文学の一環となった。そのなかで生まれた「光の中に」が持つ意味を考え、その位置付けを問い直したい。

## 一 小説が誕生した背景

「光の中に」は昭和十三年（一九三八年）年十月、「文芸首都」に発表された。当時日本は、一九三一年の満州事変から三二年一月の上海事変、三七年七月の日中戦争から四一年の太平洋戦争にいたるまでの、いわゆる十五年戦争の最中にあつた。小説が書かれた一九三九年の朝鮮は、第七代の総督南次郎によつて、兵站基地化政策と皇民化運動が同時進行させられていた。「内鮮一体」と称し、学校教育だけではなく朝鮮人の日常生活様式まですべてを日本化しようとしたのである。たとえば毎朝の宮城遙拝と正午の黙祷を通じての天皇崇拜の強制、神社参拝と神棚の各戸設置を通じての神道の強制にはじまり、朝鮮服の追放と国民服の制定、日本式作法の普及という「皇民化」運動を強行された。さらに朝鮮総督府は、一九三七年四月、習慣をもとにした家族および相続関係法を改めるためとして司法改正調査委員会を設置し、朝鮮人の姓<sup>4</sup>を日本式の氏名にかえさせることを協議し、一九三九年十一月制令第一九号をもつて「朝鮮民事令」を改正した。こうして一九

四〇年二月に施行、八月十日までに「氏」を決定して届出ることを命じた。「創氏改名」政策<sup>5</sup>の実施である。香山光郎と創氏改名した李光洙は、総督府の機関紙ともいえる「毎日新報」（昭和十五年二月二十日）に、「私は天皇の臣民である。私の子孫も天皇の臣民として生きるだろう。李光洙という氏名でも、天皇の臣民になれないことはない。しかし香山光郎の方が、より天皇の臣民たるにふさわしいと私は信ずるためである」と書いている。この発言には、「差別からの脱出」の実現化として「内鮮一体」論を受容する朝鮮側の態度が表われている。同時に、「同化政策」が朝鮮の知識人の思想に大きい変動をもたらしたことを物語っている。

朝鮮人を「忠良ナル皇国臣民タラシメル」ためには、「皇民化」教育が重要な課題となつた。一九三七年十二月には「皇国臣民の誓詞」が制定され、学校の児童、生徒はあらゆる機会に反覆朗誦させられた。その内容をみると、「一、私共ハ大日本帝国ノ臣民デアリマス。ニ、私共ハ心ヲ合セテ天皇陛下ニ忠義ヲ。三、私共ハ忍苦鍛錬シテ立派ナ強イ国民トナリマス。」というものである。また日本語を「国語」とする、植民地教育が行なわれ、学校内で朝鮮語を書いたり話したりした者は処罰された。「国語」「国民文学」の提唱に従つて、日本語を用いてもを書く作家が続々と登場した。金史良は「言語問題」について次のように語っている。

此頃頼に言語に関する問題が喧しくなり、朝鮮の作家も悉く内地語で書くべきではないかという議論が起つて、或る一部の人の間では朝鮮文学は今こそ受難期だと云はれてゐるや

うである。けれどわれわれはこの問題に際して、左程神経質にならなくてもいいと思ふ。(略)本質的な意味から考へてみれば、やはり朝鮮文学は朝鮮の作家が朝鮮語でもつて書くことに依り、始めて成立すべきことは明らかである。(略)朝鮮の作家が内地語で書くといふ場合には、いろいろと困難や不便が伴ひ情熱の分散を来す怖れが充分にある。(略)私はつまり現在の所あらゆる犠牲を払つて、自分の言葉と話しかけるべき広い読者を持ちながら、それをよそにしてわざわざ内地語で書く人々には、絶対的に、その当人に或る痛切な心的動機がなければならぬことを、前提すべきだと考へるからである。

日本文壇に進出した最初の朝鮮人作家である張赫宙も、日本語での創作目的について、「朝鮮の民族ほど悲惨な民族は世界にも少いでせう。私はこの実状をどうかして世界に訴えたい。それには朝鮮語では範圍が狭少である。その点、外国語に翻訳される機会も多いから、どうしても日本の文壇に出なくてはならないと思ひました。」と述べている。朝鮮文壇に対して金史良は、「今や朝鮮文学が中堅作家に依つて固く護られている」といつているが、実際、彼らにとつて朝鮮文壇は「範圍が狭少」であつた。金達寿の言葉を借りると、「この時期は、いうところの「朝鮮文壇」なるものはあつたか知れないが、肝じんな「朝鮮文学」そのものは全くなかつた」(太平洋戦争下の朝鮮文学)とも言えるのである。座談会で菊池寛が「朝鮮だけで歩けないのは当然だから、内地が手を出し、勞はらないと駄目だと思ふ」といつているところから

も、当時の「朝鮮文壇」に対する認識が想定できる。

「新半島文学への要望」というテーマで行なわれた、この座談会の中で「国民文学」について、崔載端は「要するに半島の文学者も内地の文学者達と共同の理想と目標の下に、同じ国語を使つてこの時代を生き抜いて行かう、さふ云ふ文学が国民文学だ」と発言している。そして、横光利一は、「何も知らない者が読んで、之が朝鮮の生活だと云ふことを感じさすものを僕等は読みたいんです」という朝鮮文学に対する要望を語っている。そのプロセスの問題においては、菊池寛が「矢張りもう少し朝鮮人の悩みだとか、苦痛なんかを或程度書くことを許して呉れないと、良い小説は出来ない」といつている。このように、朝鮮の作家たちに、日本文壇は「国民文学」の樹立を、と呼びかけた。そのような状況のなか、「光の中に」は芥川賞の第一候補作に選ばれたのである。昭和十五(一九四〇)年一月、小山書店より発行された第一小説集『光の中に』の「あとがき」に金史良は、

丁度大学を卒業した春、京城に滞在しながら、下宿の小さな温突部屋で妙にはりつめた興奮の中で一気に書き上げた。止むに止まれぬ気持ちに追はれるやうにして書いたもの一つである。(略)作品の内容を考へてみれば、現実の重苦に押され、私の目は未だに暗い所にしか注がれてゐないやうである。だが私の心はいつも明暗の中を泳ぎ、肯定と否定の間を縫ひながら、いつもほのぼのとした光を求めようと齟齬してゐる。光の中に早く出て行きたい。それは私の希望でもある。だが光を拝むために、私は或はまだまだ闇の中に体をちぢか

めて目を光らしてゐねばならないのかも知れない。

と書いている。この前年、東京帝国大学文学部を卒業した金史良は、一九三八年四月五日から一ヶ月あまり京城の朝鮮日報社に芸部記者として勤めた<sup>10</sup>。「新聞記者は意思を持った機械」であることを親友の鶴丸辰雄に訴えていたところ、五月十七日消印書簡に「僕ハタウトウココヲ止メテ行クコトニシマシタ」と記した葉書を出している。「元氣を出さずに出せない位忙しい」新聞社を五月十七日前に辞めて、六月六日、妻とともに日本に帰るまでの間に、「光の中に」は書かれたと推定される。肯定と否定との狭間に身を置いていた作者によって、追われるようにして書かれたという「光の中に」は、「私」の語り口で始まっている。

## 二 作品分析と問題提起

小説の語り手である南は、S協会<sup>11</sup>で英語を教えている朝鮮からの留学生である。小説の舞台は日本の江東区近くの工場街である。S協会とは、「帝国大學生が中心となつてある一つの隣保事業の団体で托児部、子供部、市民教育部、購買組合、無料医療部等この貧民地帯の日常生活には切りはなされない緊密な連りを持つてるところ」である。朝鮮人である南の名前は「ナム」であるが、S協会の中では「ミナミ」先生と呼ばれている。そのような呼び方が非常に気にかかっているが、様々な理由でそのまま呼ばれている。明記されているその理由とは、「無邪気な子供たちと遊ぶため」である。いいかえれば、朝鮮人の名前をもっては無

邪気な子供たちと遊ぶことができないことになる。この問題に対しては、日本の子供の認識に対する理解が要される。「光の中に」の時代背景は、三七年型のフォードが古い自動車に扱われているところから、小説が書かれた時期とほぼ同じだと考えられる。すなわち、一九三九年を小説の背景と見ることができよう。

この時代の日本の子供にとって朝鮮の子供とは、「自然の風物であるか、もしくは、一緒に遊ぶ必要のない亜日本人であった<sup>12</sup>」という。その原因とはいふまでもなく、「支配者の朝鮮認識が必然化したところの朝鮮人蔑視」によるものである。春雄が使った「朝鮮人ザバレ、ザバレ」という言葉はそのような認識を象徴的に表している。「ザバレ」というのは「捕える」という意味の「朝鮮語」である。「朝鮮移住の内地人がよくつかう言葉だった」と小説で説明されている。つまり、日本人は朝鮮人を「ザバレ」する立場で、朝鮮人はひたすら日本人から逃げる立場にある。だから南は「ナン」先生ではない。「ミナミ」先生と呼ばれることによってこそ無邪気な子供たちと遊ぶことができるのである。

「俺こそ偽善者ではないか」と苦悶しながらも、南は日本人化され又は日本人化して日本社会に身をおいている。南は「この地で朝鮮人であることを意識する時は、いつも武装してゐなければならなかつた」と語っている。そして、李青年の非難と春雄との関わりを通して、一人の泥芝居に疲れている自分の姿に自覚していく<sup>13</sup>。このような南の名前とアイデンティティーをめぐる問題は、創氏改名を含めた当時の植民地政策と結び付けて考えられる。一九四〇年二月、南次郎総督による創氏改名政令が実施される直前、金史良は「光の中に」を発表している。それに、作中「私」

の苗字は、金（キム）とか李（リ）ではない。「南」と設定されている。これには幾つかの解釈ができる。朝鮮の姓（苗字）の中で、南・林・柳・呉などの姓は朝鮮式にも日本式にも読むことができる。あえて創氏改名をしなくても日本名を持ち得る便宜性があるといえる。政策に従わなくても、逆らうことにはならないのである。「私は自分が朝鮮人だということを隠そうとするのではない。ただ皆さんがそういう風に私を呼んでくれた」と語る南は、「俺こそ偽善者ではないか」と葛藤しながらも抵抗し拒否することはできない。「南」は、このような消極的な知識人にもっとも適当な姓なのである。また金史良は、次の作品「天馬」で、創氏改名によって名前を変えた朝鮮人文学者第一号といわれている金文輯を主人公としている<sup>14</sup>。その先例として、「南」とは、南次郎総督を念頭においたことであつたとも考えられる。「同化政策」の下、その政策の主導者の名前を利用して「内鮮一体」論の矛盾と、被害者の苦しみを喚起させるための「仕組み」だという解釈ができるからである。実際、「朝鮮人民は「創氏改名」の強要にたいして抗議自殺をしたり、あるいは「南太郎」（総督南次郎を比喻して、「犬糞倉衛」、「犬馬牛豚」などの揶揄的な名前をつけて抵抗を試みた」という<sup>15</sup>。当時としては総督「南次郎」の名前からこの比喩は珍しくもないし、揶揄の代表的な先例だったのである。

このように様々な意味合いを含蓄している「南」は、周りから呼ばれている自分の名前と自分が使っている言葉との齟齬から、自分自身を確認できない状態に陥っている。自己を語れない南のような葛藤は、金鶴永の小説『凍える口』のなかでも表れている。在日朝鮮人である主人公は、「僕には僕があるのだろうかと考え

た。僕自身といえる自己があるだろうか考えた。いままで在ると漠然と思い込んでいた自分を、突然に見失ってしまったかのような、空漠とした気持ちに襲われた」と語っている。「在日」朝鮮人と、「在日」している朝鮮人留学生だからこそ、より深刻な状態にある問題。これは金史良が「在日朝鮮人」を描くのに欠かせない条件だったと考えられる。在日朝鮮人のアイデンティティの危機または喪失の問題がそれであろう。

「ミナミ」先生と呼ばれ、日本語だけを使っている南の周りには、いつも意地悪くつきまとう少年がいる。山田春雄である。正確に言えば春雄は混血二世代である。春雄の父半兵衛は、南朝鮮で日本人の父と朝鮮人の母の間に生まれ、日本に渡ってきた人物で、混血一世代に該当する。春雄はヤクザだった半兵衛と彼によって朝鮮料理屋から連れてこられた朝鮮人の母貞順の間に生まれた。山田春雄という名前で日本語を使い、朝鮮人を「必死に拒否」している春雄の姿は、「完全な」日本人であるように見える。しかし、春雄はいつも周りから孤立している。これは、春雄を取り囲んだ環境による問題と考えられる。

春雄の家庭は、家庭と言えないほど深刻な状態にある。母の頭を刃物で傷付けた父は、夢でさえ「父ちゃんは今度は僕を片付けるんだって」と寝言させるほどの恐怖を与える存在である。春雄の父は、母が朝鮮人であることを理由にいつもいじめと暴行を加えている。さらに、春雄はS協会の以前に通っていた学校の先生から朝鮮人として差別的に扱われた経験もある<sup>16</sup>。このような環境から、春雄にとつて朝鮮人とは「見れば殆ど衝動的に大きな声で朝鮮人朝鮮人と云」い、自分は朝鮮人であることを「必死」に

拒否しなければならぬ存在である。春雄は南が朝鮮人であることを知つてから、さらに意地悪く「やい、朝鮮人」といつたりする。大きい声で他人が朝鮮人であることを暴露することによつて、自分自身を守ろうとする行動であろう。自分は朝鮮人ではないという叫びなのである。反面、南は春雄から「朝鮮人」と言われるたびに、朝鮮人としての自分に目をさます。方法の差があるだけで、南にとつて春雄は、李とほぼ同じ役割を果たしているのである。つまり、春雄が南に叫んでいる「朝鮮人」とは、南に対する非難の表われとも解釈できる。南の日本人化している態度に対する拒否、非難にもなるのである。自分が朝鮮人になることを拒否すると同時に、南が朝鮮人にならないことも拒否しているのである。

南は、春雄の屈折した性格を「調和されない二元的なものの分裂の悲劇」だと解釈している。「父のもの」に対する無条件的な献身と「母のもの」に対する盲目的な背拒、その二つがいつも相剋してゐる」と語っている。南の目に春雄の姿が、いつも周りから孤立されているように映っていた理由もここにありと考えられる。最初の春雄は「心持ち白味がかつて少々気味が悪い」目と「陰鬱で懐疑的」なまなざしの子供に描写されている。李が尋ねてきたとき、「春雄のまなざしばかりは異様な光」を点していた。南は、その「薄光りしていた目」がずっと以前から自分を「疑いの目」で監視していたようだと語っている。その上、春雄の丸背にしろ、口の恰好にしろ、箸の使いわけまでも、どうも曰くがありそうで思ひ出せない。それは、先年、留置場で会つた半兵衛のためであつた。南は半兵衛に最初会つたとき、「皺びた馬面に大き

な目がでれりとして薄気味悪い男だつた」と覚えてゐる。いつかの夜、自己の過去をこそこそと言つたときの半兵衛の目は、「一層凄惨な影を宿して」いた。春雄を最初見た瞬間から、南の目には半兵衛の映像がかすかながらの光芒をもつてちらついていたのである。傍の小さい女の子を実に残忍な程までに腕をふり廻して打つている春雄の暴力性も、半兵衛を連想させる。

南は、春雄が自分を見た最初の瞬間から、朝鮮人であるまいかと疑いながらも自分につきまといつていたことを、自分に対する愛情だと理解している。母の病院に行くかわりに自分のところに来て来たのは、母への愛の一つの歪められた表現に違ひないと考へている。同じことが半兵衛からも窺える。半兵衛にとつて朝鮮人とは、徹底的な嫌悪の対象であるはずなのに、なぜ彼は朝鮮人である貞順を妻にしたのであろうか。その経緯についても「料理屋にかけあいに行つて障子に火を附けおどかし、無理やりに連れて帰つた」という。自ら語つた通り、半兵衛が浅草を縄張りとして、有名な俳優連を恐喝して大金をせしめたという高田組の相棒だつたとすると、半兵衛に日本の女を妻にすることは容易くできたと考えられる。それなのに、半兵衛は「無理やりに」朝鮮の女を連れてきた。彼の内面には故郷朝鮮に対する、または朝鮮人の母に対する愛情が潜んでいたからではないだろうか。南は、春雄が自分に愛情を持つことを、「母のもの」に対する無意識ながらの懐かしさの歪められた表現だと語つてゐる。半兵衛の場合、留置場で自分が南朝鮮で生まれたことを話す行為、そして「無理やりに」朝鮮の女を妻にした行為なども、内面からの懐かしさによるものと考えられるのである。このような彼らの内面は、「父

のもの」と「母のもの」、「献身」と「背拒」という調和されない「二元的なもの」に分裂され、いつも相剋している。

自分の周りを意地悪くつきまとう春雄に対して、南は誰よりも愛情深い態度で臨んだ。彼を「宥して」、「出来るだけ研究し徐々に指導して行こう」とする南によって、春雄は変化していく。すっかり自分に心を許したような春雄のきらめいている目を見て、南は「彼の心の世界にもこういう美しいものがひそんでいるのを見ていない」と考える。最初、春雄は「異常な子供」と認識されていた。S協会以前に通っていた学校の教師の話をしてから、あわてて取り消す春雄は、南にとつて「へんな子供」であった。そして、半兵衛の存在を思い出した南は、「この変質的な春雄がしまいに父のような人間になりはせぬか」という恐ろしい予感に戦慄する。しかし、南の説得で母のところに行ってきた春雄は、素直な子供らしい姿を取り戻している。板垣直子の言葉を借りれば、「光の中に」は、朝鮮人の母親を持つてゐることを卑下し、ひねくられてしまつてゐる一人の少年を、青年教師の温かい愛情が、すなほな心持に取戻す事情が展開してゐる<sup>17)</sup>のである。

ところで、「光の中に」が日本文壇で高く評価されたのはなぜだろうか。その答えは、朝鮮人の母親を持つてゐることを卑下していた少年が素直になつていく小説の展開にあるのだろうか。とすると、日本文壇の評価に対する金史良の「否定」は何を意味しているのだろうか。

### 三 作品に対する「評価」と「否定」

昭和十三年十月、「文芸首都」に発表された「光の中に」は、芥川賞の候補作に選ばれることによつて、翌年、「文芸春秋」に再掲載された。「文芸春秋」(第十八巻、四号)の「話の屑籠」には、「芥川賞は、別項の如く定まつた、殆んど全委員の一致することであつた。僕も、最初金史良君の作品を読み感心したが、すぐその後で、「密猟者」を読んで、すぐそれに定めてしまつた」という菊池寛の文章が掲載されている。第十回芥川龍之介賞には、寒川光太郎の「密猟者」が当選した。候補作にとどまりはしたものの、選評委員のほぼ全員が金史良の「光の中に」を高く評価している<sup>18)</sup>。「光の中に」に寄せられた選評を概観すると、瀧井孝作は、小説に描かれている「朝鮮人の民族神経」というものは「今日の時勢に即して大きい主題だ」と述べている。また、久米正雄は「内鮮人問題を捉えて、其示唆は寧ろ国家的重大性を持つ」といい、川端康成は「民族の感情の大きい問題に触れている」と評している。佐佐木茂索は「価値あるテーマ」に注目し、佐藤春夫は、「私小説のうちに民族の悲痛な運命を存分に織り込んで、私小説を一種の社会小説にまでした手柄と稚拙ながらもいい味のあつた筆致」と評価している。そして、宇野浩二は「半島人の入り込んだ微妙な気持ちの平暗を、さまざまの境遇の半島人を、それを現すのに適当な題材に依つて、可なり巧みに書かれてある」と述べている。

横光利一が言ったような、「之が朝鮮の生活だと云ふことを感じさすもの」を読みたがつていた日本文壇の要望に巧く応えたの



か、好意的な評価が寄せられている。しかし、佐藤春夫と川端康成の発言には注目しなければならない。佐藤春夫は、「光の中に」を候補作品に決定する際に、「何やら非常に愉快で幸福に似たような気持」さえ感じたと語っている。そして川端康成は、「作家が朝鮮人であるために推薦したいといふ人情が、非常に強く手伝わっているところもある」と述べ、「主張が先立って、人物が註文通りに動い」ていると指摘、「幾分不満であった」と記している。川端康成が指摘している「先立っている主張」とは何を意味していたのか。

朝鮮の平壤に帰郷していた金史良は、保高德蔵の電報で知らせをうけて、昭和十四年三月六日の夜、レインボウ・グリルで開かれた文芸春秋社主催の芥川賞授与式に参加する。このときの感想については、同年四月「文芸首都」に掲載された「母への手紙」<sup>19</sup>に、「非常に幸福な気持ちでした」と回想している。ところが、「光の中に」に対する選評に接したときの気持ちについては、次のように書き残している。

私の小説の広告見出しの下には、佐藤春夫といふ作家の批評として、「私小説のうちに民族の悲痛な運命を存分に織り込んだ作品」といふ風な文字が、枠付きではひつてゐるのです。(略) 本当に私は佐藤春夫氏の云はれるやうなことを書いたのであらうかと。(略) 私はもともと自分の作品でありながら、「光の中に」にはどうしてもすつきり出来ないものがありました。嘘だ。まだまだ自分は嘘を云つてゐるんだと、書いてゐる時でさへ私は自分に云つたのです。(略) さうだ、こ

れからはもつとほんたうのことを書かねばならないぞと自分に何度も云ひました。

この文章通りに解釈するなら、「光の中に」は「嘘」であり、「ほんたうのこと」を書けなかった、または書かなかった作品となる。「民族の悲痛な運命を存分に織り込んだ作品」であることを自ら「否定」しているのである。人に見せるために書いたこの文章に、どれほどの信憑性があるか問題は残るが、「嘘」「本当」という金史良の言葉には、「光の中に」を理解させる鍵が潜んでいると考えられる。川端康成が指摘した「先立っている主張」を考慮して、金史良の言う「嘘」と彼が書きたがっていた「ほんたうのこと」の意味するものについて考える必要があるだろう。

北朝鮮の評論家チャン・ヒョンジュンは「作家は何故うそだと言っているのか」という点に注目し、次のように述べている。

作品に朝鮮人民の悲惨な姿が描かれているのは否定できないが朝鮮民族の悲痛な運命を存分に織り込んだものではない。この作品の制限性は混血児である春雄少年の問題を作品の基本問題として設定しているところから現れている。このような問題設定としては悲痛な朝鮮民族の運命を存分に織り込むことはできない。何故かという点、悲痛な朝鮮民族の運命問題は日帝によって搾取されている朝鮮人の問題で、春雄のようなそんな混血児に関する問題ではないからである。<sup>20</sup>

つまり作家が自ら「嘘」だと書いたことを根拠として、「光の

中に」は「民族の悲痛な運命を存分に織り込んだ作品」ではないという批評である。その原因には、「混血児」である春雄を基本問題とした作品の設定を挙げている。チャン・ヒョンジュンの批評通り、春雄のような「混血児」の問題を「嘘」と、朝鮮人の問題を「悲痛な朝鮮民族の問題」つまり、「ほんたうのこと」と言いきれるのだろうか。さらに、「光の中に」には「朝鮮人の問題」が描かれていないと言えるのだろうか。

小説の登場人物を見ると、「純血」朝鮮人に李チャンと李の母。「混血」に半兵衛と春雄が登場している。南先生と貞順も「純血」朝鮮人であるが、この二人は、日本人化を志向している朝鮮人である。名前を日本化し、日本語だけを使う意識的な努力をしているこの二人は、「純血」朝鮮人、「純血」日本人、どちらにも帰属することができていないといえる。小説では、「混血」の半兵衛・春雄と日本人志向の南先生・貞順が対立している。「純血」朝鮮人である李は彼らの間で、積極的な役割を果たしている。「光の中に」に登場する「朝鮮人」李チャンについては次のように語られている。

李チャンは自動車の助手をしながら夜になるとS協会で英語と数学を習っている在日朝鮮人である。協会では、ミナミ先生と呼ばれている若い帝国大生の教師がいる。李は、南の眼や顎骨や鼻立からきつと朝鮮人に間違いないと考えていたが、ある日、南が朝鮮人であることを知り、南を非難する。李は「私のやうな職場の人々に苗字のことであるいろいろ気拙いことが多いです。」<sup>21</sup> といながら、自分は「卑屈な真似もしたくない」という態度を明白にしている。このように李は何の躊躇もせず日本人化を拒否できる

人物である。彼の老母もいつも朝鮮服を着ている<sup>22</sup>。春雄の母が半兵衛から怪我を負わされたとき、彼女を協会に運んできたのも李であった。李は春雄を見るだけで激怒する。李の姿は、春雄が朝鮮人を激しく嫌悪している姿と対照的である。貞順に対する李の行動には朝鮮人の同胞愛が表れている。

小説の後半部に、李は免許状が下りて一人前になる。自動車助手から、ようやく一人前になったのである。彼は「三七年限だけれどわりに新しいし、エンジンもしっかりしてゐる」「随分いい車」に乗って南と春雄の前に現れる。「当時朝鮮人の職業といえば土方が屑屋、さもなければ体じゅうを糞まみれにしている「おわい屋」でしかなかった」<sup>23</sup> という状況からみると、李は当時の朝鮮人としては成功しているように見える。このような李の姿から分かるように、「光の中に」で苦しんでいるのは日本人化を志向し同化政策に順応している朝鮮人であり、「純血」朝鮮人はたくましく、積極的に生きる者として語られている。

「純情」な李の姿に対面した南は、「過去において私自身もそういう時期をとおって来たから」彼を理解することが出来ると自分自身に語っている。先年、二ヶ月余り留置場を体験したことがこの言葉を裏付けている。過去、李のように「純情」だった南は、卑屈の泥沼に足をつつまみ始め、朝鮮人である自分と、武装している自分が「激しい格闘」をするようになった。しかし、いつも様々な言い訳をもって一人の泥芝居をしている自分の姿に疲れをお感じる。そして、自分の姿が、「俺は朝鮮人だ」と喚び立てる山田春雄でん屋の男と、自分は「朝鮮人ではない」と喚き立てる山田春雄と「本質的な所」には、何の相違もないと自覚するに至る。李の

「純情」な姿が、彼を自覚させたともいえるのである。

小説の最後で、自動車助手から一人前になって南と春雄の前に現れた李の希望に満ちた姿は意味深い。南と春雄にとつての希望は、二人とも舞踊を得意とするという共通点に見られる。春雄は最初から南の前で気味よきようにひょうきんな踊りをしてみせたりしているが、このような春雄について母貞順は、「踊りがうまいのです。妾悲しゅうございました。どこかで見て来ては、一人で一生懸命踊ります。そして自分でも泣いています」と語っている。南にすっかり心を許した春雄は、「僕、舞踊家になるんだよ」と叫ぶ。そんな春雄の姿から南は、「この異常な生まれをもつ、傷めつけられ歪められて来た一人の少年が、舞台の上で脚を張り腕をのばして、渡り合う赤と青の様々な光を追いながら、光の中に踊りまくる像がちらついて見えた」と思い、アパートを借りて春雄に舞踊の稽古をつけようと決心する。舞踊が媒介となって、二人にも希望が与えられたかのようにみえる。

ここで見逃せないことがある。踊りが好きだという二人には、それが「暗い所」でないと駄目だという特異な点まで一致している。春雄は「明るいところでは駄目だよ。舞踊は電気を消して暗い所でやるもんさ」といい、南も「暗い所で踊るのが好きなんだ」といつている。春雄と南に共通しているこの「暗い」の必然性は、小説の「あとがき」で語っている金史良が持つ「暗い」のそれと相通じている。「あとがき」において金史良は、「私の目は未だに暗い所にしか注がれてゐない」、「光を拝むためには、まだまだ闇の中に体をちぢかめて目を光らしてゐねばならない」といつて、「暗い」現実と自分の姿を表現している。この語りからは、小説

のある場面が浮かび上がる。母のところを訪ねた春雄は、南を見ては逃げてしまう。南が春雄を見付けたときの場面は、「二階へ上る階段の裏側の薄暗い隅の方に、山田春雄が射すくめられたように身を隠したまま目を光らしたのである」と描かれている。暗い所で踊り、闇の中に体を縮かめている彼らは、「光の中に早く出て行きたい」という共通の「希望」を持っている。しかし、「重苦な現実」は「肯定と否定」の分裂を招いた。この分裂による悲劇が、小説に通底している。

まず、「父のもの」と「母のもの」に対する「献身」と「背拒」に混沌されている春雄と半兵衛の内面的分裂がある。また、「俺は朝鮮人だ」と喚んでいるおでん屋の男と自分は「朝鮮人ではない」と喚き立てる山田春雄の姿、それと「本質的な所」何の相違もない南の「卑屈」で「偽善者」のような姿がある。それらは、調和されない「二元的なもの」に分裂され、相剋している。また前述したように、春雄の孤立もこの分裂によるものといえる。調和されない分裂によって春雄はいつも周りに孤立していた。しかし、母の所に行ってきたから南と上野に出掛けた春雄は「幸福そうで晴々」といつている。南は、「少年春雄は今凡ての人々の中にいるんだ」と考え、「みちあふれるような歓び」を感じる。日曜の非常に込んでいる松坂屋で人々の中にある春雄の姿に、南は「どうしても不思議な程に嬉しくてならなかった」といつている。「調和されない」分裂でいつも孤立していた春雄が人々の中にある姿を見て、南は不思議なほど歓びを感じているのである。「調和した」春雄の姿からの歓びは、分裂の「克服」、「和解」を暗示している。南に心を許し、母の所に一度行ってきたことよつて、

「二元的なもの分裂」から「克服」で来たというのだ。

しかし、春雄と貞順が和解する場面は直接描かれていない。観察者の南によって推測されるばかりである。それに協会の仲間たちと、父半兵衛との関係も以前のままである。貞順と半兵衛、そして南自身にも結局は何の変化もないまま小説は終わっているのである。このような小説の展開が、金史良を「光の中に」にはどうしてもすつきり出来ないものがありました。嘘だ。まだまだ自分は嘘を云つてゐるんだ」と書かせた原因となつたと考えられる。

#### 四 「二元的なもの」についての一考察

以上、金史良が「光の中に」に対して、「嘘だ」と書き残したことについて、作品の分析を通じてこの「否定」の意味を探ってきた。しかしこのような試みは、あくまでも作家の言葉に基いた、「嘘」と「本当」という発言自体の信頼性を疑わない範疇内でのものである。さらに「光の中に」が「日帝統治」という「枠」の下で書かれたという時代背景を考える必要があるだろう。

金達寿は「金史良・人と作品」の中で「そのころの私たちは略嘘と真実をとちがえても勝手な思考をめぐらすという悲しいふうがあり、金史良も作品のなかでそれをかいている<sup>24</sup>。」と述べている。金史良がいつている「嘘」「本当のこと」と金達寿がいつている「嘘」「真実」の意味が一致しているとは断定できない。ただし、「嘘」「本当のこと」について考える際、二重の、もしくはそれ以上の「仕組み」が小説の中に内包されていることは考慮

しなくてはならない。金達寿は続けて、金史良の作品には検閲に対する考慮が払われているといい、それを「当時の一つの方法」として認識している。「社会に対する激しい意欲を反映し、微妙なたちでその抵抗を打ちだしているというのが、彼の作品の基調であった」と分析している。いいかえれば、当時の特殊な時代状況では、作品にはある「仕組み」が要求されていた。朝鮮を分裂させている日本に対する抵抗を、検閲からの工夫によって作った「仕組み」を通して描いたといえる。金史良が書き残している「嘘」「本当のこと」という言葉それ自体が一つの「仕組み」を形成している可能性もあるのである。

芥川賞選評で、川端康成は「光の中に」に対し、「主張が先立って、人物が註文通りに動いている」と指摘していた。「嘘」「本当のこと」が、ある「仕組み」によって表面化されたときに生じた「ズレ」に、川端康成は着目したのではないだろうか。作者自身もその「ズレ」に気付き、それによる自覚を「嘘」「本当」という言葉に残したのではないだろうか。自分自身が抱いていた「二元的なもの分裂」とは、そう簡単に、少なくとも「光の中に」で見せたような形では克服できないものだったに違いない。「光の中に」の次の作品、「天馬」がそのような作家の自覚を裏付けている。「光の中に」では「希望的」に克服できたかのように描かれた「二元的なもの分裂」は、「天馬」に至って「否定的」に描かれている。金史良は「天馬」に対して「否定的な面のみ執拗に喰ひ下がった傾きはあるが、それでも已むに已まれぬ気持で、かくも憎むべき主人公をよくよく横行させる社会を呪ひ、且つさういふ人物をみて朝鮮人全般を兎や角云つて貰つては困ると

いふことをも暗示しなかったが、却つて事實は逆効果を呈したのか、一二の内地人の友達や批評家から余り自虐的になり過ぎてあると云はれた<sup>25</sup>」といっている。内地人の批評家から「余り自虐的になり過ぎてゐる」と指摘されたことは、「天馬」にも「ズレ」を感じさせるものがあつたことを示している。「光の中に」が「嘘」に傾いてしまつたとすると、「天馬」は「本当のこと」に傾いてしまつたのであろう。

一九四五年、日本の敗戦によつて解放を迎えた朝鮮で「鳳凰閣の座談会」が行なわれた。この座談会で金史良は、「一語で言う」と文化人というのは最低の抵抗線で二歩後退一歩先進しながらも戦うのが義務だと思ひます。何をどのように書いたかが論議されるべき問題です<sup>26</sup>」と発言している。当時の朝鮮人作家が物を書くことの意味を考えさせる発言である。「嘘」と「本当」をめぐる分裂の問題は、「何をどのように書くか」という工夫による「一つの創作方法」として存在したことに注目しなければならぬ。作品がある「仕組み」を孕んでいたのは、その根源に「内地」日本とその一部分となつた「外地」朝鮮との調和されない「二元的なもの」があつた所以であらう。

### 【注記】

- 1 座談会「新半島文学への要望」(『国民文学』一九四二年三月)
- 2 前掲書
- 3 金達寿『玄海灘』(筑摩書房一九五四年一月)
- 4 「朝鮮の親族集団の核は、朝鮮伝統の宗(そう)と呼ばれる祖先祭祀を中心とした男系の血族集団である。男系血縁系統を表示する「姓」

と、一族の始祖の発祥地名を表示する「本」の二つの記号を組み合わせた「本十姓」を広い意味での姓といい、この広義の姓が同族であるか否かを識別する基準となつている」金英達『創氏改名』(明石書店一九九二年二月四九頁)

5 朴慶植『日本帝国主義の朝鮮支配下』(青木書店一九七三年六月二二頁)  
「総督府が加えた社会的な制裁①創氏をしない者の子弟にたいしては各級学校への入学・進学を拒否する。②創氏をしない児童にたいして日本人教師は理由なく叱責・殴打し、児童をして父母に哀訴させ創氏させる。③創氏をしない者は、公私を問わず、総督府関係にいつさい採用しない、また現職者も漸次罷免措置をとる等。

6 「朝鮮教育史」(『世界教育史大系』5) 講談社一九七八年四月)

7 金史良「朝鮮文化通信」(『現地報告』文芸春秋社一九四〇年九月)

8 任展慧「張赫宙論」(『文学』一九六五年一月)

9 金史良「光の中に」(小山書店一九四〇年一月)

10 「僕は新聞社から呼ばれて、北京を引き上げ、五日からここへ勤めてゐます。君など新聞社の方を止めたことは賢明だつたと思ひます。新聞記者は意思を持つた機械です。却つてただの機械でありたい。といふのは、何ものも意思を持つて動く時は疲れるのです」一九三九年四月一日二日消印、鶴丸辰雄宛の葉書(『金史良全集』河出書房新社一九七三年四月)

11 『金史良作品集I』(河出書房新社一九七三年二月)の任展慧の解題によると、「東京帝國大學セツルメント」を指すと思われる。同会は一九二四年六月設立された。江東の一角に立てられた「四角い白亜の殿堂」の「帝大セツルメント」は、学生と大衆とを結びつける生きた接触機関としてユニークな存在であつたという。

12 小沢有作『在日朝鮮人教育論』(亜紀書房一九七三年一月)

13 「日本人の歪んだ朝鮮人観の中に自分を投げ入れるのを望むのでなければ、日本社会の根づよい偏見や差別に傷つけられない誇り高く生きる根拠としての民族意識で武装しなければならぬ」金贊汀『故国からの距離』（田畑書店一九七九年九月一七七頁）

14 南富鎮『近代文学の〈朝鮮〉体験』（勉誠出版二〇〇一年一月四五頁）

15 朴慶植『日本帝国主義の朝鮮支配下』（青木書店一九七三年六月一三頁）

16 「僕の學校の先生はちやんと云つたんだぞ。この朝鮮人しやうがねえ、小學校へ入れてくれたのも有難いと思へつて」『金史良作品集Ⅰ』（河出書房新社一九七三年二月一七頁）

17 板垣直子『事変下の文学』（日本図書センター一九九二年三月一八八頁）

18 以下の「光の中に」に対する選評は、『芥川賞全集2』（文芸春秋社一九七二年三月三九三頁）による。

19 金史良『金史良作品集Ⅳ』（河出書房新社一九七三年四月一〇四頁）

20 （論者訳）チャン・ヒョウジュン『金史良作品集』（文芸出版社（北朝鮮）一九八七年四月）

21 「創氏改名」の施行後、初期に届出をした人々の職業を調べてみると、一位が水産業、二位が交通業であった。その中でも人に接する機会が多い自動車業主が一番多い。創氏改名をしないまま働いている李チャンの大変さが分かる数値である。宮田節子の『創氏改名』（明石書店一九九二年一月）参照。

22 「白衣の朝鮮服を着た母とそうして歩いているときまっぴいっも同じことがあったからである。どこからとなく必ず「やーい。チョーセンジン」という声が入ってきた」金達寿『わがアリランの歌』（中公新書一九七七年六月）

23 ①金達寿（前掲書一〇六頁）②「戦前の在日朝鮮人の三大職種は「坑夫」「職工」「土工」といわれてきた」仲原良『在日韓国・朝鮮人の就

職差別と国籍条項』（明石書店一九九三年六月）

24 金達寿「金史良・人と作品」（『金史良作品集』理論社一九七二年四月三二一頁）

25 金史良「朝鮮文化通信」（前掲書）

26 （論者訳）『人民文学』（創刊号一九四六年一〇月四五頁）

（九州大学大学院修士課程一年）